

かぐらおが

(題字は初代学長 山田守英氏)

第105号

平成13年5月31日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課



(写真撮影 教務部長 風間國康)

かたくり群生 (突哨山)

新入生を迎えて……………久保 良彦………… 2	平成13年度大学院入学者名簿…………… 10
医学科新入生のみなさんへ……………近藤 均………… 3	教授就任のご挨拶……………若宮 伸隆………… 11
看護学科の新入生を迎えて……………望月 吉勝………… 4	日本に来て3年間……………高 弼虎………… 12
医学科入学式集合写真…………… 5	研究室紹介……………沖 潤一………… 13
平成13年度医学科入学者名簿…………… 5	新歓合宿を終えて……………三浦紗智子………… 13
看護学科入学式集合写真…………… 6	大学祭のお知らせ……………小谷 俊雄………… 13
平成13年度看護学科入学者・第3年次編入学者名簿………… 6	平成12年度学位記授与式…………… 14
新入生を迎えて……………松井 あや………… 7	平成13年度入学式…………… 14
新入生を迎えて……………高橋 聖子………… 7	平成13年度運営組織…………… 14
旭川医科大学に入学して……………米谷 理沙………… 8	新入生研修実施される…………… 14
旭川医科大学に入学して……………良永 明博………… 8	学生団体一覧…………… 15
旭川医科大学に入学して……………青山 悦子………… 9	平成13年度の主な行事…………… 16
旭川医科大学に入学して……………高梨 愛子………… 9	教官の異動…………… 16
外国人留学生一覧…………… 10	窓 外……………原 明義………… 16



新入生を迎えて

旭川医科大学長 久保良彦

入学者選抜の難関をパスし、21世紀最初の入学者として本学に入学された医学科第1学年95名、看護学科第1学年60名、同じく看護学科第3学年編入者10名の皆さんを本学教職員は心から祝福し、歓迎申し上げます。

入学者の皆さんが旭川医科大学を選んで受験し、合格されたということは、本学が社会に代わって、皆さんを近い将来、社会に奉仕する医療者としての資質と適性があると判断したことになります。それはまた、社会の人々が皆さんを選び、自分達の健康と幸福を皆さんに負託したのだと考えていただきたいと思います。

申すまでもないことですが、皆さんがこれから学ぶ医学は自然科学だけの学問ではありません。それは対象となる人間が、生物学的に存在するなかで精神や心理をもつ形而上学的な存在であり、さらに家族や社会の中であって集団をつくる社会的存在でもあるからです。それ故、医学は自然科学・人文科学および社会科学といった広域性をもつ学問なのであります。

また、医療というのは、このような医学を人間あるいはその集団である社会へ適用することであり、広い意味の医学に含まれます。従って、医学は科学 (science) だけでなく、その実践に当たっては技能 (art) を必要とします。さらに大切なことはそれが患者という病気を持った人間への行為であることから、実践者である医師やナースなど医療者には人間性 (humanity) が求められるということです。この場合、科学は医師やナースなどの頭脳のことであり、技能は手や腕、人間性は心の問題であります。ここでいう技能は技術 (technique) と同じ意味ではなく、技術を使いこなす能力 (skill) と解されます。人間性はやさしさ、思いやりなど身についた心根といいかえることができます。

さて、新しい世紀では科学のいろいろな分野でさらなる発展が期待されております。とりわけ医学・医療にとって21世紀は爆発的ともいえる進歩がその特徴となるだろうといわれます。それは基盤となる分子あるいは細胞生物学の発展に確かな足どりがみられているからです。

そしてそれらの基礎研究の発展は、臓器移植、生

殖技術、遺伝子診断、遺伝子治療あるいは再生医学といったさまざまな高度・先進医療の開発に繋がるものです。

しかし、一方では、このような高度な先進医療が開発され、医療の現場に持ち込まれる場合、常に生命倫理の問題がかかわってくることは申すまでもありません。そして新しい科学技術の開発がさらに進み、いままで踏み込んだことのない領域が次々と開かれるに従い、人類の自己調節能力が耐えられるかどうかという思いもよらない深い倫理問題が生じてくる可能性も危惧されます。これからの医療を担う皆さんに、より深く広い人間学の学習が望まれる所以であります。

旭川医科大学では数年前より全面的なカリキュラムの改革に取り組んでおります。それは近年の医学・医療の日覚ましい進歩・発展に伴う情報量の増大に対処するためと、医学教育における体験学習の大切さを重視した結果であります。

多くを教え学ばせるという従来の教授法に比べ学生が主体的に自ら学ぶ、いかにすると自分で課題を見出し、自分でそれを解決する力を身につけさせる方向が近年の医学の急速な発展に則したよりよい医学教育法であると判断されたからです。

このカリキュラムを生かすためには、学生それぞれが良い医師・看護職者になるという明確な自覚をもち、自ら学ぶ努力をすることが何より大切な条件となります。

ちなみに、本学で医学教育に当てられている時間は医学科で4,185時間、看護学科で2,655時間となっております。これらは皆さんの6年間 (医学科) あるいは4年間 (看護学科) の全持ち時間の僅か8%と7.5%に過ぎません。急激に増加している情報量に対して、それらの時間がいかに少ないものであるか、さらに残りの90%余りという大学外の自分の時間を有効に過ごす自己学習がいかに貴重であるかがこのことからお分かりいただけると思います。

新しい世紀の医療を担う皆さんが本学で知識と技能を研鑽し、人間性の陶冶に努められることを期待いたします。

平成13年4月6日入学式致辞
(一部加筆)



医学科新入生のみなさんへ

医学科第1学年担当

近藤 均

春陽いまだ淡き中、今年もめでたく新入生を迎えました。医学科新入生はわずか95名（男子67名、女子28名）ですが、年齢・出身地・経歴・性格・趣味・特技などはさまざまです。入学のルートが推薦・前期・後期と3つあり、それぞれ「得意ワザ」で勝負できることも、新入生の多彩さにつながっているのでしょうか。個性豊かな面々が互いに切磋琢磨し、友情を深めつつ勉学に励むことを切に願ってやみません。

本学医学科では、3年前、カリキュラムの全面改革を断行しました。低学年から「医学チュートリアル」「早期体験実習」「総合生命科学」など、専門教育を意識した内容が盛りだくさんになりました。その分、いわゆる一般教育（とりわけ人文社会系は教養教育）の時間は大幅に減りましたが、スタッフは「量より質」の精神で臨んでいます。選択科目の大半は看護学科との合同授業ですから、授業を通じて看護学科の学生との協調も深めてください。

さて、私も学年担当を拝命した以上、みなさんの顔と名前はきちんと覚えませんが、中学や高校のクラス担任とは違って、みなさんの方からのアプローチがない限り干渉はしません。学年担当の職務を端的に表現すると「よろず相談係」ということになります。私自身はもともと文科系の人間ですから、医学部の学生に的確なアドバイスができるか不安もありますが、かえって斬新な発想で対応できるかも知れないと、いささかの自負ももっています。本学は小規模な大学ですが、幸い、学問的にも人格的にも優れたスタッフ・先輩が多数います。そういう方々のお知恵も拝借して、真摯に問題解決にあたりたいと思います。

近年とくに深刻なのが、進路変更にかんする悩みです。本学に入学したものの、授業になじめない、よく理解できない、あるいは、別の大学・学部に進学したかったが偏差値による輪切り指導や親の希望などを優先させてしまった、などと思い悩む人が少なくないようです。自分自身のしかも1回限りの人生ですから、よく考え、悩み抜いて、悔いを残さないように対処してください。

そんな迷いのない人も、授業中にコンプレックスを感じることは多々あると思います。なにしろ名門

進学校の出身者が多く集まっているのですから、なかなか「優」はとれません。「優」をとろうとあせると、精神衛生上よくありません。低学年のうちには、「可」で結構、というくらいの気楽な姿勢で臨んだほうが、かえって良いように思います。ただし、医師国家試験は年々厳しくなっていくようですから、くれぐれもサボり過ぎないように。また奨学金受給者は、成績が悪いと、受給が取り消される可能性がありますから注意して下さい。

学業はもちろん大切ですが、とくに低学年のうちには、クラブ・サークル・ボランティア活動・大学祭など、「遊び」（換言すれば「ゆとり」）の時間を通して、友だちの輪を広げていくことも心掛けてください。くれぐれも、特定の人物や団体にのめり込んで「洗脳」されないこと。また、交通事故に注意し決して加害者にはならないこと（国家試験を受けられなくなる可能性があります）。さらに、異性交友（交遊？）では節度を保ち、決してトラブルを起こさないこと。

授業や遊びを通して、幅広く深い「教養」を身につけてください。

ところで教養とは何でしょうか。私が尊敬する歴史学者のひとり阿部謹也氏（一橋大学名誉教授）は、「教養がある」とはどのような状態かを定義して、「自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のためになにができるかを知っている状態、あるいはそれを知ろうと努力している状況」と述べています。じつに味わい深い言葉だと思います。

紙数の関係で書き尽くせないことが多々あります。参考書として下記の本を薦めます。

<読書案内>

- *『大人のための勉強法』正統2冊
和田秀樹著 PHP新書（2000～01年）
- *『大学で学ぶべきこと、学ばなくてよいこと』
鷺田小彌太著 PHP研究所（1998年）
- *『「教養」とは何か』
阿部謹也著 講談社現代新書（1997年）
- *『大学論』
阿部謹也著 日本エディタースクール（1999年）
- *『教養論ノート』
浅羽通明著 幻冬舎（2000年）

（歴史 教授）



看護学科の新入生を迎えて

看護学科第1学年担当 望月吉勝

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。看護学科は、昨春第1期生を、そして今春第2期生を送り出したばかりです。皆さんは第6期生として、この若い学科の歴史を創っていくことになります。第1期生と第2期生の全員が看護婦（士）の国家試験に合格したことは、本当にうれしいことでした。だが、国家試験に受かることは最終目標ではなく、むしろ看護の専門職者としてのスタートです。これから皆さんは、その土台となる勉強をするわけです。

医もそうですが、看護もScience（科学）でありArt（技術）です。ここでScienceと言う語は分かるとして、Artという語が分かりにくいと思うので、少し説明しておきます。医聖ヒポクラテスに由来する言葉に“*Ars longa, vita brevis.*”、英訳では“*Art is long, life is short.*”があります。ここでのars（=art）は芸術ではなく医術を指します。医術は深淵で、これを極めるには時間がかかる、だから倦まずたゆまず努力が大事と、補足したくなるのは、教師の職業病でしょうか。ともあれ、医療にしる、看護にしる、そのほかの領域にしる、およそ専門家というからには、その領域の体系立てた知識を持っていると同時に、技術を身に付けていなければなりません。つまりサイエンスとアートは車の両輪なのです。

大学での勉強とは、教えてもらうのではなく、自ら学ぶことです。自ら学ぶ方法を身につけることが大事です。そして、先生達や図書などresources（資源）を活用し、自らの学習に役立てることも大事です。これらは、大学での学習でも、卒業してからの生涯学習でも大事なことです。これから、たくさんの事柄を学んでいくのですが、たくさん有りすぎて憶えられない、出来ない、高校までの嘆き方で足踏みしては前に進めません。たくさん有るにしても、核となる事柄とそれを取り巻く事柄（重要度もピンからキリまで）が有るはずで、もっとも重要度の判断には或る程度の下地が必要ですから、とりあえ

ず取り組んでみる、そして考える、工夫する、調べる、相談するなどを試みて、自ら学ぶ方法を早く身につけてください。

高校までのようなホームルームの時間は無いので、学年担当といっても、毎日決まった時間に皆さんと顔を合わせるわけではありません。大学生である皆さんは、ジリツ（自律&自立）した生活が出来ることが原則です。もちろん相談が有れば、いつでも研究室のドアをノックしてください。

どの授業で顔を合わせるのかが分かるように、私が担当（あるいは分担）する科目について述べておきましょう。まず、第1学年前期には「公衆衛生論」があります。この科目では、人間集団の健康とQuality of Lifeを守るための公衆衛生活動について学びます。第1学年後期の「健康教育論」では、人間の健康行動に関する様々なモデルや健康教育に用いる様々な方法について学びます。これらの科目で扱う事柄は非常に広範囲に渡るので戸惑うかもしれませんが、いずれも看護の各専門領域の基礎となるので、そのつながりを意識しながら学習してほしいと思います。第2学年での担当科目はありませんが、第3学年の「看護研究（統計学含む）」では、研究方法の一般論を分担します。また、第3学年前期には「看護学英語」があり、皆さんは少人数のグループに分かれ、セミナー形式で看護および関連分野の英語で書かれた論文を読みます。看護の各専門領域の学習、そして研究方法論の学習を踏まえて、第4学年では「卒業研究」に取り組みます。自分の興味のあるテーマについて、計画・実施・分析・発表という研究のプロセス全体を体験します。これは時間と労力がかかり、少々辛いかもしれませんが、卒業後に専門職として知的共有財産（研究論文）を創り出すためのトレーニングです。

結びにもう一度。Ars longa, vita brevis.

（地域保健看護学講座 教授）





新入生を迎えて

医学科第6学年 松井 あや



新入生のみなさん、入学おめでとうございます。新しい環境、講義、友人、部活動…何となく落ち着かない毎日の中、まだ6年もあるんだ、と先の見えない思いを抱いている方もいらっしゃるでしょうが油断は禁物、6年間なんて本

当にあつという間に過ぎていきますよ。

多くの方にとっては20代の半分近くを費やすこの大学生活ですから、ぜひ悔いの無い様に過ごしたいものですね。先に5年間を過ごした者としては、この間にやるべきことはもちろん勉強と、そして人間の幅を広げることではないかと思えます。

医学部にこられる皆さんにとっても、大学の試験勉強は受験の時よりももしかしたら辛いものでしょう。怖いのはどう勉強するかは全て自主性に任されていることです。時間をかけ知識を定着させても一夜漬けで次の日には空っぽでも、試験に通

れば上の学年へ進めます。基礎医学をなめると臨床医学を学ぶ時大きなつळेを支払うはめになるのでご注意を。

でも、同じように大切なのは人格の幅広さを身につけることかもしれません。これから皆さんを待ちうけているのは、先輩にご馳走になるご飯や週末の楽しいドライブだけではなく、くじけそうになる試験勉強や、医師を目指すことへの迷いなど苦しい局面もきっとあるはずですよ。そんな時、相談できる仲間や気分を変えるのに役立つ趣味を持っていたら素晴らしいけれど、まずは多方面から物事を見つめ、問題を解決できる自分作りができていくのが一番ではないでしょうか。部活動に打ち込むこと、勉強や趣味、アルバイトなど私生活の面で自分に合ったやり方を築いていくことで、何でも自分の成長に結びつくと思います。旭川医大は医学部のみの単科大学ですから、外部との交流をはかるのも、ものの見方の幅が広がりとてもよいことでしょう。何に対しても、これだと思ったことに積極的にトライし、浅く流してしまわず、その中から何かをつかんでいって下さい。ご健闘を祈っています。

新入生を迎えて

看護学科第4学年 高橋 聖子



新入生の皆様、御入学おめでとうございます。大学生活には慣れましたか？北海道もようやく春を迎え、大雪山系の雪解けも始まりました。みなさんの緊張も雪解け

とともに解け、大学生活の楽しさを感じ始めていることと思います。

大学生活は全てが学びです。自分にとって全ての経験が、学びだと思えます。授業だけでなく、遊び、バイト、サークルも全部が学びとなり、皆さんの豊かな経験として、これからの人生に活かされるでしょう。その中で、自分の個性を磨いていってほしいと思えます。

私は中学時代から手話を続けています。現在も、

学外の手話サークルに通い、学んでいます。そうした中で、病院における手話の必要性を感じずにはられません。ろうあ者とのコミュニケーション手段は手話に限らず、筆談や口話など他にもあります。しかし、手話が必要とされるのは、ろうあ者の母語であり、安心感を生むからです。私は自分の手話技術を生かし、少しでもろうあ者が安心して生活できる看護を提供していきたいです。このように考え、実践できるには、今まで積み重ねてきた経験があるからです。みなさんも、「自分だからできる事」を大切に、伸ばしていって下さい。ときに、励みになり、勇気づけてくれると思えます。

これから、試験や実習など辛いときもあると思いますが、初心を忘れず、自分の目標に向かっていって下さい。最後に、皆さんにとって、充実した大学生活が送れることを心から、お祈り申し上げます。

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年 米谷理沙



旭川医科大学に入学してもうすぐ1ヵ月が過ぎようとしているが、私は今だに自分が医大生であるという実感がわいていない。まして、自分が6年後医者として働く姿など想像すらできない。私の高校時代は部活中心だった為、がむしゃらに勉強していたわけではないのでまさか本当に医大に合格できるとは夢にも思っていなかった。担任だった先生にも半ばあきらめられていた様である。そんな私が、生まれ持った強運で合格。“人生何が起こるか分からない”とはよく聞く話だが、私は身を持ってこれを経験したと言ってよい。そんな私が医大生である実感がわからないのも当然といえば当然かもしれない。けれど授業で覚えなければならない事、自分で考えなければならない事は莫大な量で、は

やくもめげそうになっている。しかし自分は長い間、医師という職業を目指して勉強してきた訳であり将来人の命に一番近いところで働くのだから、少々事でねをあげてはられない。何事にも努力すれば乗り越えられるはずだ。そう言い聞かせて生きている今日この頃である。

私は医者に最も大切なものは、患者さんの心の痛みがわかるやさしい心だと思っている。6年間ひたすら勉強だけしていても、心の冷たいただの医療人間になってしまうに違いない。確かに勉強する事は大切な事であり、不可欠であるのだが、他にも学生時代にやらなければならない事はあるはずだ。その一つとして、福祉施設などの現場を体験する事があげられるだろう。旭川医科大学には、早期体験学習という実習がある。私がこの大学を選んだ最も大きな理由の一つにあげられる。今はまだ、体験していないが、この実習を通じて、医師として大切なものを学びとりたい。そして有意義なキャンパスライフになる様に何事にも積極的に取り組みたい。自分に負けない様頑張ります。

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年 良永明博



旭川医科大学に入学して二週間が過ぎましたが、とても忙しい毎日です。大学受験の時の勉強とは全く異なるチュートリアル学習や第二外国語の習得など、多少の不安を懐きながらも一生懸命に取り組んでいます。私は高校生の時に生物学を履習していなかったためチュートリアル学習の発表の準備や、高校で習うべき生物学の理解を目的とする総合生命科学Ⅰの復習には人一倍の努力が必要とされています。時には理解が進まなく気分が沈んでしまうこともありますが、その疑問点が解決された時は生物学のおもしろさを感じ、また「驚異の小宇宙」とも称される人体の不思議さに感心して満足な気分になります。高校生の時に私の先生が「大学に入ると今のような知識詰め込み型の勉強ではなくなり、自主的に学問をすることが重要

になってくるよ」というような事をおっしゃって私を励まして下さいましたが、その意味を「これが大学の勉強か」と理解しながら忙しい毎日を過ごしています。

さて私は良い医師になるためにこれから六年間医学をしっかり勉強していこう、と考えているのですが、どのような医師が良い医師であるといえるのでしょうか。まず高い医療技術を身につけていることが必要であると思われます。しかしそれだけでは人間が人格をもった存在である以上患者さんを健康にすることはできないと思います。「医学は人間学である」という言葉を私は聞いたことがあります。医学、ひいては医療の対象は心をもった人間なのです。したがって良い医師は優れた医療技術はもちろんのこと、患者さんの苦しみに共感できるような優しさをもっていなければならないと思います。短く言えば「クールな頭とホットな心」が必要とされるわけです。この二つを身につけることは容易ではないと思いますが、これからの六年間、そしてその後の長い医療活動の中で少しずつ身につけるよう努力を重ねていきたいと考えています。

旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年 青山悦子



私がこの旭川医科大学に入学してはや2週間。初めての一人暮らしにも、ようやく慣れてきました。当初は知っている人もいなく、うまくやっていけるかどうかとても不安でした。しかし、その不安とは裏腹にすぐに友人もでき、看護科のみんなともうちとけ、充実した毎日を送っています。部活、サークルの先輩方もとても親切で、人間関係を広げることができました。

この大学のいい所は、看護婦、保健婦、助産婦全ての資格を取れる可能性があるという所です。その分勉強は大変ですが、多くの事を学び広い視野を持つことによって、看護職者としてだけでなく1人の人間として成長することができそうです。

去年から新カリキュラムになり、より深い看護の勉強ができると同時に、一般教養も広く学ぶことができるようになりました。また、勉強だけでなく、部活動も盛んに行なわれており、熱心に取り組むことのできる学校です。

私が他のどの職業よりも、看護職に就きたいと思った理由は、人間の心と心のつながりが何よりも強く大切なものだと感じ、私もそれに直接関わりたいと思ったからです。病気やケガで苦しみ、精神的に不安になっている患者さんの話を聞き、支えになって、少しでも患者さんが病気やケガを克服できるよう手助けしたいと思っています。専門的な知識や技術はもちろんのことですが、この大学の4年間で多くの人々と接し、豊かな人間性を築いていきたいです。ただ漠然と、毎日過ごすのではなく、この大学で学んだ全てのことを吸収し、立派な看護職者になれるよう努力していきたいです。

旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年 高梨愛子



旭川医科大学に入学して、半月が過ぎようとしています。まだ半月ですが、この半月の間に、いろいろなことを経験しました。新入生歓迎合宿や新入生合宿研修を通して、友達もでき、大学とはどんな所なのかということも、少しわかってきたような気がします。授業も始まり、どこを勉強すればよいのか、何をノートにとればよいのか、正直言ってまだよくわかりませんが、高校時代よりも、自分自身で考え、判断して学んでいかなければならないということは強く感じています。また、初めての一人暮らしは、確かに気楽ではあるのですが、大変なことが多く、親や家族のありがたさを改めて感じさせられています。

「看護学生は忙しい」とは、高校時代からよく耳にし、目にした言葉でした。実際に入学してみると、時間割りには空きがなく、確かに忙しいと感じています。今は授業だけで大変な毎日ですが、先輩方は時間を上手に使って部活やアルバイト等をしているようなので、私もがんばってみようと思います。大学では、勉強はもちろんですが、他のことにも力を入れ、様々なことを経験し、学んでいきたいと考えています。たくさんの経験や人との交流を通して視野を広げ、この旭川医科大学で人間としても成長していきたいです。看護の知識や技術をしっかりと学び、そして、心のケアのできる看護職になるために、4年間充実した学生生活を送り、できる限りの努力をしていきたいと思っています。

この先、つらいことや大変なことがあっても、合格したときのうれしかった気持ちや、今思っていることを忘れず、共通の目標を持った友人達と支え合い、前へ進んでいきたいです。

外国人留学生一覧

平成13年4月1日現在の本学在籍の外国人留学生は、大学院学生6名、研究生2名、学部学生3

名の合計11名です。

11名の方々は一覧のとおりですが、挨拶を交わすなど簡単なことから交流を深めてゆきたいものです。
(学生課)

氏名	通称	性別	国籍	種別	期間	所属
PAN,BOCHEN (潘 伯臣) パン ボーチェン	パン	男	中国	大学院 第3学年	1999.4.1～ 2003.3.31	細胞・器官系
GAO,BIHU (高 弼虎) ガオ ビフー	ガオ	男	中国	大学院 第3学年	1999.4.1～ 2003.3.31	生体情報調節系
XIN,FENG (辛 夙) シン フツン	シン	男	中国	大学院 第3学年	1999.4.1～ 2003.3.31	生体情報調節系
BALJINNYAH,ERDENECHIMEG バルジャンニム、エルデネチメグ	エルデネ	女	モンゴル	大学院 第2学年	2000.4.1～ 2004.3.31	生体情報調節系
ZHAO,YAWEI (趙 亚薇) チョウ ヤーウィ	チョウ	女	中国	大学院 第1学年	2001.4.1～ 2005.3.31	細胞・器官系
ZHAO,CHUNLEI (趙 春雷) チョウ シュンライ	チョウ	男	中国	大学院 第1学年	2001.4.1～ 2005.3.31	細胞・器官系
WANG,GUOLI (王 国丽) ワン グオリ	ワン	女	中国	研究生	2000.10.1～ 2002.3.31	生科学第二講座
MAMUTI,WURAMU (馬木提 吾拉木) マムティ ウラム	ウラム	男	中国	研究生	2001.1.1～ 2002.3.31	寄生虫学講座
AZAHARULDIN BIN ABDULLAH アザハルルディン アブドゥーラ	アザハル	男	マレーシア	医学科 第4学年	1997.4.1～ 2003.3.31	
HAIRUL ANUAR BIN AMIR ハイルル アヌアル アミル	ハイルル	男	マレーシア	医学科 第4学年	1998.4.1～ 2004.3.31	
KHALILATI BARIZAH ハリラティー バリザー	エラー	女	マレーシア	医学科 第3学年	1999.4.1～ 2005.3.31	

平成13年度 大学院入学者名簿

平成13年度博士課程入学者名簿

氏名	専攻	指導教官
長峰美穂	生体情報調節系	高後 裕
酒巻雄二	生体情報調節系	岩崎 寛
間宮敬子	生体情報調節系	岩崎 寛
豊島優人	生体情報調節系	菊池 健次郎
上田修	生体情報調節系	藤枝 憲二
横田陽匡	生体情報調節系	吉田 晃敏
大隅大介	細胞・器官系	石川 睦男
稲葉勇平	細胞・器官系	高後 裕
中西京子	生体情報調節系	菊池 健次郎
押味貴之	生体防御機構系	高後 裕
辻ひとみ	細胞・器官系	飯塚 一
菅原亮一	生体情報調節系	吉田 晃敏
宮内和誠	生体情報調節系	牧野 勲
玉木陽穂	生体情報調節系	牧野 勲
尾崎篤子	細胞・器官系	葛西 眞一
高崎英気	生体情報調節系	千葉 茂
趙亚薇	細胞・器官系	石川 睦男
趙春雷	細胞・器官系	油野 民雄

平成13年度修士課程入学者名簿

氏名	専門分野	指導教官
寺島泰子	看護管理学	良村 貞子
羽原美奈子	地域・環境看護学	北村 久美子
志賀加奈子	母子看護学	岡田 洋子
山内まゆみ	母子看護学	野村 紀子
田上理津子	地域・環境看護学	北村 久美子
原口真紀子	母子看護学	野村 紀子
山本美紀	看護管理学	良村 貞子
山内学	看護管理学	良村 貞子
五嶋里見	母子看護学	野村 紀子
八代樹依	地域・環境看護学	北村 久美子
高橋美和	母子看護学	野村 紀子
千代慶子	看護管理学	良村 貞子
上田順子	看護管理学	良村 貞子



教授就任のご挨拶

微生物学講座 教授 若宮伸隆

平成12年11月1日付けで、本学微生物学講座教授として赴任いたしました。着任まで研究所に在籍していたために、講義、実習などの時間数が少なく、のんびりしており、ご挨拶が遅れ皆様にご迷惑をおかけしました、この場を借りてお詫び申し上げます。11月に旭川に移り住んで、教授室から見える大雪山に感動していたら、雪が降って寒くなり、講義と実習であつという間に平成12年度が終わってしまいました。医学部にやってきて、初めての学年試験も無事終了し、学生の皆さんも、教室員も、なんとなく安心された様子を見て、私自身もほっと一息ついています。まだまだ十分とはいえませんが、これからも一生懸命に講義、実習を務めさせていただく所在であります、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

以下に自己紹介をかねて、新任のご挨拶をさせていただきます。私は大阪で生まれ育ち、高校卒業後弘前大学医学部に入学し、卒業後大阪府立病院にて小児科研修を行ないました。白血病や川崎病などの原因不明の病気を目にして基礎医学の勉強の必要性を感じ、大阪大学微生物病研究所大学院（加藤四郎名誉教授）に入学しウイルス学や免疫学を学びました。大学院終了後、ハーバード大学ダナファーバー癌研究所に留学する機会を得て、分子生物学や生化学を中心とする細胞生物学に研究をシフトしました。帰国後は大阪大学微生物病研究所にポジションを与えられ、微生物表面の糖鎖に着目した基礎研究とその後赴任された栗村敬名誉教授からエイズを中心とする臨床ウイルス学を学びました。

次に私の現在行なっている研究についてすこし述べさせていただきます。留学から帰国後、ウイルスの糖蛋白に結合する蛋白質の解析をしている際に動物血清レクチン（血液、羊水、肺胞分泌液に存在し、糖を結合する蛋白質）を初めて知りました。このレクチンは、内部構造にコラーゲン様構造を有するために現在ではコレクチン（コラーゲン+レクチン）と呼ばれています。その当時遺伝子解析の結果が出ておりませんでした。このレクチンの欠損しているヒトは、易感染性である

という記述に目を惹かれました。「レクチンならば糖蛋白や糖脂質に結合できるはずであり、それらを表面にもつウイルスに結合して（中和抗体の如く）ウイルスの感染阻止をおこすのでは？」と考え、この仮説を証明する研究を思いつきスタートしました。約10年経ち、この仮説を支持する報告が相次ぐようになり、コレクチンの機能の本態が微生物（ウイルス、細菌、カビ）に対する防御機能であると認知されるようになりました。そして今、コレクチンを利用する経路は、ホヤなどの原索動物以上の動物種で保存されており、補体系とも相まって先天性の生体防御機構に深く関わりと考えられています（詳しくは蛋白質核酸酵素2000年4月号拙総説参照）。その後、私自身の研究も進み、幸運にもいくつかの新しいコレクチン遺伝子のクローニングに成功しました。現在は、世界で初めてクローニングした、これらコレクチン蛋白質の機能解析を行なっているところです。

このように微生物学講座は若干スタイルを変えて、新しい21世紀を迎えました。私自身も研究スタイルを、少し臨床寄りにして、臨床系の先生方に本教室を、分子生物学、生化学、免疫学研究教室として活用していただけるようにと考えております。幸い現在扱っております、新規コレクチンはスカベンジャー受容体機能をもっており、血管内皮細胞などに局在し、動脈硬化や血管炎に関わることが推測されます。血管を研究の材料としておられる臨床系の先生方の研究参加を希望しております。また学生の皆さんも興味のあるひとは遠慮なく遊びに来てください。サイエンスをするのに年齢は全く関係ありません、学生でもやる気のある人は大歓迎いたします。皆さんとともに切磋琢磨しながら、旭川から世界へ発信できる教育、研究を目指したいと思っています。

最後にお願ひですが、大きな声で耳障りな大阪弁を喋りながら、わいわい議論している小柄なおじさんを見つけたら、声をかけてください。学生の皆さん、先生方の微生物学講座へのご来訪を教室員一同心からお待ちしております。



日本に来て3年間

大学院 第3学年 高 弼 虎

北海道でも一番寒い旭川を暖かいと言うとびっくりする人が多いと思います。しかし、事実です。私は中国の吉林省から来ました。気温はあまり差がありませんが、冷たい風で本当の寒さを覚えます。この寒さが私が日本に来た原因です。私は大学を卒業して、救急内科医師として働き始めました。低体温、凍死の臨床例を数多く経験しました。このことから、私は寒冷に対する体温調節機構に興味を持ちました。中国では、この研究があまりにも進んでいなかった。先進国である日本では、かなり進んでいるだろうと思いました。

1997年私は文部省の国費留学生として、日本に来ました。旭川に来てからもうすぐ4年になります。この4年間、黒島晨汎教授のもとで勉学や研究を通じて、色々な高度な理論と技術を習得し、様々な人との出会いから日本人の勤勉さ、たゆまぬ努力と強い目的意識などを感じました。私も、同じような素晴らしい医学研究者になるのが夢です。特に北海道のような寒冷地で意義深い熱産生調節機能に対する研究を続け、体温調節など色々な生理現象の解明のために頑張りたいと思います。勉強や研究を通じて色々な高度な技術を習得することが大事だと思いましたが、日本人の真面目に仕事に取り組む精神、従順温和的な性格、正しい礼儀などを勉強することも同じく大事だと思いました。

日本では、特に旭川がとても住みやすいと

ころだと思います。日本に来て最初は、言葉が一番の悩みでした。多くの場合、自身をうまく表現することができず。また、他人の話しがよく理解できずに困る事がよくありました。言葉の壁を越えると、もう一つだったのは日本の文化や習慣、私には大きなショックでした。日本の文化は中国から来たと言われているが、日常の習慣は大分変わっていると思います。色々な事で表現方法や考え方が違って、誤解があり、一時期に大変悩みました。しかし、大学でも、街でも、旭川の人々は本当にやさしかった。この4年間、たくさんの友達を作りました。研究生活以外、色々な活動に参加することができまして、様々な話題で自由に交流しました。お互いに理解も進みました。昔、日本と中国の間に不幸な歴史がありました。これを忘れてはいけませんが、これからどうやって両国の友好を発展すればいいかということは、大事だと思います。従って、我々国費外国人留学生は日本にいる間だけではなく、自分の国に返っても、両国の友好交流のための橋になることが日本政府や国民の本意であると思います。

4月からもう3年生になりました。研究生活にはあとの2年が短い時間ですが、一生懸命頑張って多くの知識を掌握して、博士号を取ることが、周りで支援している多くの人々の期待を裏切らないことだと思います。

研究室紹介

小児科学講座 助教授 沖 潤 一

旭川医科大学の小児科学講座は、昭和49年4月1日に吉岡 一先生（初代教授）、奥野晃正先生（第二代目教授）、藤田晃三先生の3名が発令を受けたのが始まりで、以後27年間に同門会員が137名という大所帯になりました。さらに、平成12年11月16日に第三代目の藤枝憲二教授が就任し、特に内分泌、分子生物学などの診療・研究面を中心に更なる発展を目指しています。

小児科学教室の同門からは、旭川厚生、名寄市立、療育センター、北海道療育園等、道北主要都市を含め各地に複数の小児科医が常勤し、充実した卒業研修体制を築き上げたと自負しております。

大学の診療では、内分泌・糖尿病・肥満、神経精神、新生児、循環器、感染・免疫、遺伝、血液・悪性腫瘍のグループがあり、小児科という一つの科ではありますが、様々な専門分野各々が自由に議論を重ねることができる雰囲気があります。各グループの診療・研究は、内分泌では成長障害、肥満、性の分化・成熟機構などの病態・病因を、分子遺伝学的、分子生物学的手法による解明を行い、遺伝では、各種疾患の遺伝的異常の研究のみならず、患者の会への支援などを行っています。神経では、

高次脳機能障害の研究、てんかん・脳性麻痺児における生体リズム障害に取り組んでいます。感染・免疫では、HIVを含めた感染症の治療、MRSA院内感染の分子疫学、ゲノム解析によるA群溶連菌の病原性の解明を行い、循環器はカテーテル治療に積極的に取り組み、生体リズムの解明や動脈管や肺循環に関する研究を行い、新生児は今年オープンするNICUの準備に追われながら、リスクの高い低出生体重児の管理・治療を行っています。血液悪性腫瘍は、4月から吉田先生を迎え、従来から行っている造血幹細胞移植などを、更に発展させていく予定です。長期治療が必要となる患者が多く、訪問学級の設置等で、入院生活を充実させております。このように小児科では、個々の患者さんを大切にしながら、幅広い分野に取り組んでおります。新たな力をいつでも歓迎します。



総回診風景

新歓合宿を終えて

新歓実行委員会委員長 三浦 沙智子

私たち新歓委員は新入生に楽しんでもらえることを一番の念頭におき、去年の自分たちが迎えられる側だった合宿を思い出しながら、良かった点、悪かった点を考え、私たちなりの合宿を作り上げるため、合宿係を中心に色々な案を出し合い準備を進めてきました。当日、実際に合宿が始まると、次々と予想外のことが起こりましたが、そのたびに皆で協力してなんとか無事に合宿を終えることができました。学生課の方々、上級生のみなさん、特にホテルの方々には無理なことばかりをお願いしたにもかかわらず、寛大な気持ちで私たちに協力して下さったことをこの場を借りてお礼申し上げます。そして新入生のみなさんと楽しく2日間を過ごせたことを心からうれしく思います。来年も今年の反省を生かしたすばらしい合宿が行なわれることを楽しみにしております。

大学祭のお知らせ

大学祭実行委員会委員長 小谷 俊雄

新世紀を迎えはや数ヵ月、旭川医大にも毎年恒例の医大祭の季節がやって参りました。今年度は6月15日から3日間開催することとなり、4年生を中心に実行委員会を結成し準備を進めている最中です。

ところで今年の医大祭は、テーマを「医科フェスタ2001～医大の枠を越えて、旭川の祭へ」とし、新世紀という節目に新しい医大祭の形を提案します。昨年を大きく上回る企画内容を準備し、広報活動を幅広く行なうことで、他大学に引けをとらないものを作り上げ、市民の皆様様に「旭川の祭」として認知して頂くことが狙いとなっています。

今年は、旭川では滅多に見ることのできないゲストや、楽しい企画が目白押しとなっています。私達の試みに御期待下さい。そして多くの方の御来場を一同心よりお待ちしております。

企画（名称は仮） 6月16日（土）

- 萩原次晴講演会 ○フリーマーケット ○公開模擬授業
- 受験相談 ○医学展（体験コーナー付）○健康診断
- ゲーム大会 ○模擬店 ○花火大会

6月17日（日）

- ゲストライブ（景品抽選会付）(W-inds、八反安未果、SDP)
- 公開模擬授業 ○受験相談 ○医学展（体験コーナー付）
- 健康診断 ○パークゴルフ大会 ○模擬店 ○後夜祭

学内ニュース

平成12年度 学位記授与式

平成12年度学位記授与式が、3月24日(金)10時30分から本学体育館において挙行されました。

式では、本学室内合奏団が奏でる調べのなか、卒業生170名(医学科101名、看護学科69名)に学士学位記が、博士修了者18名に博士学位記が一人ひとりに手渡されました。

ついで学長から卒業にあたり式辞が述べられました。

(学生課)

平成13年度 入学式

医学科・看護学科の入学式が、4月7日(金)10時から本学体育館において挙行されました。

式では、新入生155名(医学科95名・看護学科60名・看護学科第3次編入生10名)を代表して医学科 浅羽瞳さんが宣誓を行い、医学生・看護学生としての自覚を新たに大学生活の第一歩を踏み出しました。

(学生課)



平成13年度 運営組織

本学には、医学教育についての調査研究、教育課程の編成、修学指導、授業及び試験の実施、単位の修得及び履修、学籍関係等について審議する機関としての教務委員会と学生の厚生補導に関する調査研究、学生の課外活動、福利厚生等について審議する機関として厚生補導委員会がありましたが、平成13年度から両委員会をまとめ教務・厚生委員会としました。

委員会の平成13年度の委員は次のとおりです。

<教務・厚生委員会>

- 委員長 片桐 一 (副学長)
副委員長 山内 一也 (図書館長)
委員 八竹 直 (保健管理センター長)
近藤 均 (医学科第1学年学年担当)
林 要喜知 (医学科第2学年学年担当)
谷本 光穂
鈴木 裕 (医学科第3学年学年担当)
伊藤 亮 (医学科第4学年学年担当)
羽田 明
葛西 眞一 (医学科第5学年学年担当)
松野 丈夫 (医学科第6学年学年担当)
千葉 茂
望月 吉勝 (看護学科第1学年学年担当)
石川 一志 (看護学科第2学年学年担当)
岡田 洋子 (看護学科第3学年学年担当)
北村久美子 (看護学科第4学年学年担当)

新入生研修実施される

平成13年度新入生合宿研修が、看護学科は4月16日(月)・17日(火)、医学科は4月23日(月)・24日(火)の1泊2日で共に、美瑛町大雪山白銀観光ホテルにおいて実施されました。

研修では、特別講演等有意義な内容で執り行なわれ、看護学科では、交流会において新入生及び教官との親睦、医学科においては新カリキュラム・先輩からのメッセージに対して新入生と教官との間で、今後参考となる質疑応答が行なわれました。

(学生課)



学生団体一覧

平成13年度承認された学位団体は以下のとおりです。

【体育系】

(平成13年4月現在)

団体名	会員数	責任者		顧問教官	備考	団体名	会員数	責任者		顧問教官	備考
		学年	氏名					学年	氏名		
1 ラグビー部	33	医5	土井 崇裕	原渕 保明	継続	22 サイクリングクラブ“ちりんご”の会	14	医4	寺下 勝巳	山崎 浩	継続
2 準硬式野球部	34	医5	丹保亜希人	吉田 晃敏	"	23 女子バスケットボール部	25	医5	小林 祐希	千葉 茂	"
3 卓球部	41	医4	岩崎 剛志	谷口 成実	"	24 ソフトボール同好会	22	医3	赤坂 直哉	渡部 剛	"
4 陸上競技部	25	医5	渡邊 浩司	稲尾 茂則	"	25 マラソンクラブ	10	医5	渡邊 浩司	飯塚 一	"
5 競技スキー部	54	医5	奥山 峰志	小川 勝洋	"	26 女子バレーボール部	24	医3	一色 史枝	谷本 光穂	"
6 ゴルフ部	34	医5	板橋健太郎	紀野 修一	"	27 アイスホッケー部	22	医4	結城 一声	松野 丈夫	"
7 硬式庭球部	33	医5	金野 陽高	田中 達也	"	28 男子ハンドボール部	23	医5	荒木 保清	上口勇次郎	"
8 バドミントン部	60	医4	藤田 雅樹	川村祐一郎	"	29 乗馬クラブ	8	医6	高野 和哉	金子 茂男	"
9 男子バスケットボール部	26	医5	木村 文昭	千葉 茂	"	30 R・F・S・C(釣り同好会)	11	医3	櫻本万治郎	山内 一也	"
10 空手道部	18	医4	只野 雄飛	相澤 仁志	"	31 カヌー部	10	医3	古川 健太	宮本 和俊	"
11 柔道部	7	医4	山内 直人	原渕 保明	"	32 女子ハンドボール部	19	看3	大友 淑子	上口勇次郎	"
12 サッカー部	36	医5	小林 浩	菊池健次郎	"	33 ピクニック同好会	25	医4	中垣 裕介	内藤 永	"
13 男子バレーボール部	16	医3	今西 俊介	東 信良	"	34 トライアスロン部	6	医4	白石 学	本間 龍也	"
14 剣道部	24	医3	近藤 祐地	山崎 弘資	"	35 インラインホッケー部	24	医3	石居 信人	松野 丈夫	"
15 山岳部	13	医4	増田 竜大	佐藤 啓介	"	36 スキューバ・ダイビング部	8	医3	梅澤 耕学	林 要喜知	"
16 弓道部	37	医5	橋 賢廣	吉田 逸朗	"	37 草野球同好会	47	医3	吉光 雅志	林 要喜知	"
17 ワンダーフォーゲル部	10	医4	安田 耕一	山内 一也	"	38 HMS~総合格闘技同好会~	26	医4	岡田 耕平	小川 勝洋	"
18 大東流合気道部	21	医4	橋崎 友美	林 要喜知	"	39 旭川医科大学ヨサコイ研究会	35	医2	榎谷 将偉	林 要喜知	"
19 ソフトテニス部	45	医4	山内 直人	石川 睦男	"	40 ボーリング同好会	28	医4	佐藤 泰征	廣岡 憲造	新規
20 水泳部	33	医3	大坪 雅見	石川 睦男	"	41 ツーリング同好会	9	医4	谷紀 幸	小川 勝洋	"
21 基礎スキー部“SNOW INJECTION”	41	医5	丸茂 岳	油野 民雄	"	41団体	1037				

【文化系】

(平成13年4月現在)

団体名	会員数	責任者		顧問教官	備考	団体名	会員数	責任者		顧問教官	備考
		学年	氏名					学年	氏名		
1 写真部	8	医2	塩田 義彰	谷本 光穂	継続	17 ビリヤード研究会	14	医5	藤岡 俊介	上口勇次郎	継続
2 E・S・S	16	医4	中島 翠	内藤 永	"	18 温泉研究会	25	医4	岩崎 剛志	谷口 成実	"
3 医療研究会	8	医4	遠藤 尚宏	宮本 和俊	"	19 華道部	14	医2	内田 暁彦	中村 正雄	"
4 茶道部	19	医4	高橋紀久子	坂本 尚志	"	20 園芸療法研究会	26	医4	三浦 巧	安川 緑	"
5 将棋部	10	医3	北岡 寛教	上口勇次郎	"	21 AMC ² (エイムシー スクウェア)	11	医2	松本 哲	橋本 眞明	"
6 JAZZ研究会	16	医4	高田 延寿	佐賀 祐司	"	22 蟲の会	7	医4	平林 耕一	伊藤 亮	"
7 ギター部	7	看3	田村亜沙美	林 要喜知	"	23 電子音楽研究会	15	医4	阿部 暢彦	近藤 均	"
8 ロック研究会	36	医4	上野 伸展	伊藤 博史	"	24 熱帯医学研究会	8	医4	平林 耕一	伊藤 亮	"
9 聖書研究会	9	医5	安藤 牧子	内藤 永	"	25 文芸サークル〜ぶんぶん	4	医4	遠藤 尚宏	近藤 均	"
10 プラスアンサンブル	14	医3	岩本 英孝	北 進一	"	26 競技マージャン同好会	10	医4	中山 智英	近藤 均	"
11 室内合奏団	30	医4	笹栗 綾乃	北 進一	"	27 アカベラ・コーラス同好会“よつゆ”	14	看4	高松 安里	石川 一志	新規
12 旅芸人倶楽部	27	医3	佐々木卓也	原渕 保明	"	28 モルツの会	16	医3	佐藤 陽子	平 義樹	"
13 合唱部	59	医3	吉田 充彦	小川 勝洋	"	29 音楽部	9	医4	宇佐見和哉	平 義樹	"
14 旅と鉄道研究会	14	医3	坂田 志紋	平 義樹	"	30 対話者塾	5	医4	本谷 方克	近藤 均	"
15 美術部	12	医3	山手 直樹	大日向 浩	"	30団体	474				
16 A・V・A(ボランティア同好会)	11	看3	酒見 佳奈	平 義樹	"						

平成13年度の主な行事

4月6日	入学式
4月16日～17日	看護学科新入生合宿研修
4月23日～24日	医学科新入生合宿研修
6月15日～17日	医大祭
9月5日	体育大会
9月26日	解剖体慰霊式
11月5日	本学記念日
3月25日	学位記授与式

(学生課)

教官の異動

定年退職	13.3.31	生理学第一	教授	黒島 晨汎
"	"	哲学	"	岡田 雅勝
"	"	寄生虫学	"	宮本 健司
辞職	"	耳鼻咽喉科	講師	小林 吉史
"	"	産科婦人科	"	玉手 健一
"	"	歯科口腔外科	"	西村 泰一
採用	13.4.1	解剖学第一	教授	吉田 成孝
"	"	寄生虫学	助教授	山崎 浩
昇任	"	歯科口腔外科	"	松田 光悦
"	"	眼科	講師	引地 泰一
辞職	13.4.30	眼科	"	小笠原博宣

窓 外



薬理学講座 助教授

原 明 義

ドーピングとオリンピック

1992年に開催された冬季のアルベールビル、夏季のバルセロナの両オリンピック以降、オリンピックは、夏季大会と冬季大会の開催を2年ずらして交互に開催されるようになった。世界トップクラスの選手の競技を、2年毎に観られ楽しめるようになったわけである。オリンピックで、毎回のように問題となるのはドーピングである。ドーピング検査が初めて正式に行なわれたのは、1968年のグルノーブル（冬季）、メキシコ（夏季）大会であるが、当時、検査の対象となったのは、麻薬や覚醒剤など習慣性のある限られた薬物にすぎなかったらしい。現在、国際オリンピック委員会（IOC）は、中枢興奮薬（覚醒剤を含む）、麻薬性鎮痛薬、蛋白同化薬、 β_2 -刺激薬、利尿薬のほか、成長ホルモンやエリスロポエチンなどを禁止薬物に、血液ドーピングを禁止方法に指定している。

ドーピング検査で陽性となるのは、これらの薬物や方法を意図的に使用した場合だけではない。ドーピングを行なったつもりがなくても、ドーピング陽

性となり厳しい処分を受けることが、少なからずあるようだ。例えば、昨年のシドニーオリンピックで、女子体操選手が感冒薬をうっかり服用してしまったために、金メダルを剥奪されたことは記憶に新しい。また最近、成分が明記されていない栄養補助剤が、新たな問題として浮上してきた。今年2月の読売新聞によると、米国ユタ州で生産された栄養補助剤を服用したレスリングと重量挙げの選手が、ドーピング陽性となり2年間の資格停止処分となった。栄養補助剤には、蛋白同化作用や利尿作用を有する成分を含んでいるにもかかわらず、ユタ州がこれを医薬品ではなく食品として認可する条例を制定した。したがって、栄養補助剤には、これらの成分名は記載されておらず、また、商店などで簡単に手に入るところに落とし穴があったようである。ドーピングはオリンピックの価値を著しく損ねるだけに、この場合においても、IOCの情状酌量がないのは当然であろう。同時に、こうした栄養補助剤が食品として認可されたことと、それを長期間自由に摂取した場合の生体への影響に、疑問を抱かせる記事であった。

20世紀は、薬物受容体理論の確立とともに、画期的な創薬が次々となされ、人類は多くの疾病から救われるようになった。その一方で、薬物が人類のスポーツの祭典に悪用されてきたのは何ともやるせない。今世紀には、遺伝子組換えによる、いわゆる遺伝子ドーピングにまで踏み込む可能性が強く懸念されている。次回の夏季オリンピックは、2004年にアテネで開催される。舞台は近代オリンピック発祥の地に戻る。選手らもスポーツ本来のフェアプレー精神に戻ってもらうことを願っている。